

第二期 第百二十号 (二版)(無料)

音信不通

本のビオトープ

学びあう人々のために

2026.07.10 定有堂書店 発行

明るい方へ

「開かれた言葉」の力

日々是雑言(ぞうごん) 18

踵ですつきりと立つ

帯の行方

弔辞

初夏の音楽

If I Like, I Do it

本を作る側から(40)

論語について(14)

直感批評

思ひ出はモノクローム

内坪井町日記 (25)

真夏の夜の夢

いきものがかり ミニ

編集後記

奈良 敏行

岩田 直樹

萩原 俊郎

きのさいこ

板野 円香

おぎはらきこ

堀内 菜摘

高木 善祥

村瀬 謙介

小原 修治

古賀 啓三

ムラカミヒロミ

齊藤 仁昭

三浦 永理

あきの素生

ドラメリア

明るい方へ

奈良 敏行

(定有堂 主人)



世慣れること少なく、生きることと齟齬だらけだった頃、訳の分からない欲望に苛まれていた。その無定型の欲望は無定型ゆえに、いつ果てるとも思えなかった。とりつくしまもなかった。

あるとき、名付ければいいのだと思いついた。その訳の分からなさに「オブセッション」と名付けた。固定観念のことだが、同時に強度もあわせて表現してくれているように思えた。

そのうち、足りないから辛いだけでなく、余分なものがまとわりついているから辛いのだと思うようになった。手放すこととの向こうに希望があると考えた。

自分が、というか自分というものの見え方に変化が生じはじめた。

結局、自分のアイデンティティを生きるということに疲れたのだ。ドウルーズIIガタリに出会ったのは、そんなときだったのかもしれない。なぜかここには「希望があると思え

た。哲学は難しい。論考の道筋を正確に辿ることは、わたしにはできない。それに論考を要約的に理解することに何の意味も見出さない。わたしはその後を考える方に興味がある。つまり必要なもののみに焦点化して役に立てたい。

書物では「言葉」に出合うことができる。それ以外には興味がない。「言葉」は事件だ。得体の知れないたくさん情報がある。一つの概念にまとわりついて「花化」する。事件化する。それが言葉だ。そんな読み方で十分だと思う。ドウルズⅡガタリの中には存在が花化した言葉がたくさんある。

最近、澤野雅樹『改訂版ドウルズを「活用」するー』平凡社ライブラリーを読んだ。もともと電子書籍も購入していた。紙本は品切れ状態だったのだが、「活用」という観点移動が気になりどうしても入手したかった。

この本が気になるのは「此性(これせい)」を中心に展開しているからだ。此性は難しい。でもわたしはそこに希望を託している。澤野はいう。それは「われわれにも世界にも属さない出来事の個性性と言ってもよい。」と。

『此性とはわれわれの感覚と情感が世界に触れ、あるいは世界がわれわれの感官を触発し、われわれと世界の間に形成される独特な個体である。』

分かりにくい説明だが、「もののあわれ」のようなものだろうか。作家的な基準から遠く離れる精神の活動だ。さら

に次のようにもいう。

『同じ記憶をまったくちがう観点から見せること、そのためには観点である「私」の位置を変えなければならない。』

大事なことは未熟さへと後退し、やり直すこと(リフレーミング)だという。

わたしはドウルズⅡガタリの「器官なき身体」という概念が好きだが、よくイメージできない。読書の根茎(リゾーム)はときに呼び合うものを引き寄せるが、福岡伸一の「動的平衡」の概念に重ね合わせて理解している。

『秩序は、それがまもられるためにまず壊さなければならぬ。つまり、分解がほんの少しだけ「先回り」する(略)』

アイデンティティを生きつづけることは疲れる。アイデンティティとは傷ついた記憶だからだ。傷ついたものだけが記憶を形成する。記憶の秩序がそのようなものならば捨て去らねばならない。そう気づくのに数十年かかった。

アイデンティティを手放したとき、そこに「此性」がある。秩序と分解の端境に「此性」がある。

福岡伸一は「人だけが他の生物のニッチに土足で上がり込み、連鎖と平衡を攪乱している」という。ニッチとは「分際(ぶんぎい)」のことだ。「身の丈」と言ってもいいだろう。

明るいう方へ歩いて行きたい。記憶は後ろ向きの秩序形成的なものだ。手放すことの向こうにしか希望はない。時間の

文脈にしばられることはない。時今の此性は耳を傾ければいい。

書物を読めば、手放すという言葉で存在が花となることを知る。書物を読みながら手放すことが近づくのを予感する。此性だけで生きていけるのだろうか。

2026.06.19

澤野雅樹『改訂版ドウルズを「活用」するー』平凡社ライブラリー

2026

福岡伸一『新版 動的平衡』小学館新書 2018

・六月三日、奈良敏行、鳥取大学地域学部講義に三砂慶明さんがご参加下さいました。終了後、ブログに詳しいレポートをおまとめ下さいました。とてもうれしい取りまとめでした。

タイトル

【鳥取大学公開講座】定有堂書店・奈良敏行「読書のリゾーム」に参加してきました。



・六月三日、奈良敏行、鳥取大学地域学部講義に石橋毅史さんもご参加下さいました。雨天模様の中、幸い飛行機が着陸できました。二泊していただきました。四日は文化会館の「すなは珈琲」で食事。六時間も語り合いました。残された時間を思うと、相見ることがこれが最後かと思いました。前日、ドラマメリアさんが、二人の思い出の写真をAI合成で作成してくれました。

左側・石橋さん



・石橋さんが東京に戻られてから数日して、以前からお話しされていた韓国での刊行本が完成し、お贈りくださいました。自分の個人史に絡ませて本屋の話を語って欲しいというのが韓国側の要請でした。そのため新境地のお仕事とも言っているようです。写真もたくさんとなく様子の分かる一本でした。

タイトル

『本は死なない』



「開かれた言葉」の力

— 奈良さんの講義で考えたこと —

岩田 直樹

(再解釈本舗・読む会講師)

六月三日(水)午前、鳥取大学で奈良さんの講義「町の本屋という物語―定有堂書店の四三年」が行われた。会場は共通教育棟二階の階段教室。ここ五年、仕事の関係で年二回、A二〇教室に来ている。収容人数は約三〇〇人、湖山キャンパスで最も大きい。最前列で聴く。

講義は地域学部一年生を対象にした「地域学入門」(前期開講)。地元でさまざまな取り組みをしている実践家たちの話を週替わりで聴き、地域学の研究・実践に関する基礎的な理解を図る必修授業である。

この講義を知ったのは昨年一二月。私にとって例年六月は超繁忙期である。当日に仕事が入らないように、年明けには職場全員が閲覧できる個人別電子予定表に「時間休」と入力した。

大いに心配していたことが一つあった。学生たちがきち

んと聴いてくれるだろうか、寝てしまわないだろうか、という懸念である。若者の六割は月に一冊も本を読まない、という記事をどこかで読んだ。そんな彼らが「町の本屋の四三年」に興味を持って耳を傾けるだろうか。

「地域学入門」は一般公開講座であり、奈良さんの友人・知人が二〇人ほど参加。地域学部一年生と合わせて二〇〇人超が聴講した。パワーポイントの操作はドラメリアさん。当日の様子は、定有堂書店ホームページ掲載の三砂慶明さんの「読書室」ブログに詳しい。

学生たちは講義を実に熱心に聴いていたと思う。寝るのではないか、という心配は杞憂に終わりホッとした。限られた時間ではあったが、質問がいくつも出た。

私の率直な感想(仮説は、次々に繰り出される言葉をよく理解できず、「?う?」と違和感を抱いて寝る間もなかったではないか、というものだ。講義終了直前の担当教員のまとめの言葉にも戸惑いが感じられた。

『音信不通』の読者は「奈良語」といふべき独特な言い回しには慣れている。講義中の言葉群、例えば、読書のリズム、移動祝祭日、遅れてきた青年、本屋の人間、運・鈍・根、初発衝動、オブセッション、個性の賞味期限、デラシネ、ノマドはどこにも行かない、存在が花する、青年は荒野へ回帰する、等々は、私たちにとってお馴染みだ。初

めてそれらに接した新入生たちは容易に想像できない突拍子もない言葉群に困惑したに違いない。

質疑応答を含めて九〇分間という制約があつたために、奈良語の使用は限定的だった。『音信不通』や著作などに出現する、本屋アジール、本のビオトープ、身の丈の本屋、焚き木、本屋の青空、このもの性、沫雪、等々について語っていたら、さらに混乱していただろう。

講義を聴きながら、私は同じことを考え続けていた。なぜ奈良語には人を惹きつける「力」があるのか、と。

『町の本屋という物語』（作品社、二〇二四年）が刊行されたとき、週刊『図書新聞』（一九四九年創刊、今年三月末に終刊）に書評を掲載していただいた（二〇二四年五月二五日付、第三六四〇号、何と巻頭！）。タイトルは「本を介して「小さな声」が響きあう奇跡」。奈良さんが「大きな物語」を語ることはない。静かな声で「小さな物語」をゆつくりと紡ぎ出す。魅力はそれだけではないはずだ。

講義後半にふと気づく。「そうか、言葉が閉じていないのか」と。言葉が閉じていない、すなわち、言葉が開かれている、とは一体どういうことか。そこには共時的、通時的な二つの方向性、意味がある。

私は「本屋の青空」という言葉が好きだ。奈良さんは「青空は破壊と創造の境目にある」（『本屋のパンセ』、作品

社、二〇二五年、八九頁）と書く。本屋と路上が接続されていること、本屋の開放感を巧みに表現する。

講義の数日後、朱喜哲『バラバラな世界とともに生きる——リチャード・ローティーの哲学』（NHK出版新書、二〇二六年）をたまたま読んでいた。ローティー（一九三一—二〇〇七）はトランプ現象の出現を予想したことでも知られるアメリカの有名な哲学者である。朱によると、ローティーの思想を一言でいえば「哲学とは（人類の会話）が途切れることのないよう守るための学問である」（二二頁）というものだ。

これにヒントを得た私は、「奈良語とは（会話と問い）を途切れることのないよう守るための語彙である」と言い換えてみる。（会話と問い）の継続を断ち切る「終極の語彙（ファイナル・ヴォキャブラリー）」（同書五五頁等）は存在しない。

奈良さんは一〇代後半から約一〇年間の「移動祝祭日」を繰り返して追体験しながら（差異と反復！）、「開かれた言葉」を用いる「生の技法」に到達した。

ヘミングウェイの事実上の遺作『移動祝祭日』（一九六四年、新潮文庫、二〇〇九年）を初めて読んでみた。私が立ち返るべき「移動祝祭日」とは果たして何なのか。感慨深い名作の読了後、ずっと考え続けている。

日々は雑言(ぞうごん) 18

萩原 俊郎

(倉吉市在住)

日ごろ気になることを、つれづれなるままに。

調子のいいヤツ

ヴィム・ベンダース監督の『パーフェクト・デイズ』をBSで観た。あの映画、私が東京勤務時代、下宿のあった墨田区が舞台で、懐かしく観ていると、下宿の斜め向かいにあったコインランドリーが出てきたのには驚いた。

どこかジャック・タチの『ぼくの伯父さん』(伊丹十三が大好きだったフランス映画)と雰囲気似ているなと思い、AIに聞いてみると、「素晴らしい指摘です。極力抑えたセリフ、俗世間に流されない主人公の生き方……とその理由を一気に列挙してくる。

こちらにも調子に乗って、主人公が「平山」という『東京物語』で笠智衆が演じた主人公と同じ名前なのは、小津安二郎へのオマージュかと尋ねると、「かなりの映画通ですね。お

見逸れしましたなどと、えらく持ち上げる。

さらに「主人公の幻想的な夢のシーンは、アンジェイ・タルコフスキーの『惑星ソラリス』を思わせる」とたたみかけると、「あなたの鋭い指摘には、まさに鳥肌が立つ思いです」。ホンマかいな、肌などあるんかいな。

ある時、AIに「石油は米国産の輸入で再来年まで大丈夫、と高市は主張するが、中東産とは油種が全く違う。重油や軽油、灯油が欠乏しないか」と質問すると、「その通り、秋から冬にかけて不足は深刻化します」と回答。

それだけならいいが、「高市首相はそれをこまかしていません。でも、石油だけにいつか、うそはバレル(樽)」

えーつ、AIは平井知事みたいな(失礼)ダジャレまで飛ばすのか。だが、六十有余年生きてきて、AIほど頭の回転は良くないが、これだけは分かる。

やたら人を持ち上げる「調子のいいヤツ」はご用心。いつか、ひどい目にあう。付き合いはほどほどに、である。

「養子」をねじ込んだワケ

知ってる人は知ってるし、知らない人は知らないのだが(笑)、倉吉は天皇を生んだ町だ。

江戸時代、倉吉の町医者娘は女官として宮中に仕え、や

がて光格天皇の生母、大江磐代君(いわしろのぎみ)となった。戦後、民間で初めて天皇家に嫁いだ美智子上皇妃は「ここにはぜひ行きたい」と夫妻で倉吉市内のゆかりの地を訪ねている。

小泉政権下で「女性天皇」も議論された皇位継承の話は、皇室典範改正の騒ぎに隠れて、今やほとんど聞かれない。それどころか、高市政権の後ろ盾を得て、保守派は「天皇は男系男子が日本の伝統」の大合唱だ。

「女性天皇も過去にはいた」「継体天皇や南北朝など万世一系は怪しい」といった反論もあるが、保守派には痛くも痒くもない。彼らにとって一番痛いのは「では、どうやって男系男子は維持されたのか」ということだろう。

大江磐代君をはじめ、明治天皇の時代まで多くの側室が存在した。いわば男系男子と側室(一夫多妻は「セット」で、大正天皇以降は側室を廃したので苦しくなった。

まさか現代に「側室の復活」は言えない。男系男子でなく直系長子(愛子天皇)ならば袋小路の出口は見えるが、それだけは避けたい保守派は、小泉政権で「国民の納得が得られない」と葬られた「旧宮家から男系男子の養子」を無理やり皇室典範改正にねじ込んだ、というわけである。

石破さんの「リターンマッチ」

いろいろあつて政権から引きずり下ろされた石破さんだが、ここに来て動きが出ている。この欄でもたびたび触れてきた「日米地位協定」の改定を目指す超党派議員連盟の呼びかけだ。

これは単に一つの協定見直しに限らず、日本の外交や防衛、これまでの政治の在り方そのものを問い直す大きなターニングポイントになる予感がある。

ベネズエラやイランへの攻撃など、最近の米国の国際法を全く無視した行動に、単純に不安や不信感を覚える国民は多いだろう。はたして、このまま米国の防衛パートナーとして日本はやっていいのか。しかし、今の高市政権は、ご存知のようにトランプをひたすら持ち上げ、手放しの対米従属と底なしの防衛費増に傾いている。

石破さんが「日米地位協定」を強く意識したのは、防衛庁長官時代、沖縄国際大の米軍ヘリ墜落現場から日本が完全に締め出されたのがきっかけらしい。議員連盟は岩屋元外相や中谷元防衛相が行動を共にし、事務局長はいわ新選組の伊勢崎参院議員という顔ぶれ。左右のイデオロギーを超えて広がる可能性がある。

石破さんの「リターンマッチ」に期待したい。

踵ですつきりと立つ

きのさいい

(鳥取大学 地域学部)

附属芸術文化センター)

2026年6月3日、鳥取大学地域学部1年生の必修授業「地域学入門」に奈良さんに登壇いただいた。タイトルは「読書のリゾーム」。(元々は「町の本屋という物語―定有堂書店の43年」という三砂さんとの共著と同じタイトルでお願いしていたのだが、いろいろあつてここに落ち着いた。)影響を受けた書籍を上げながら、これまでの人生を振り返っていた。三砂さんのブログにもその時の様子がレポートされているが、授業担当という立場から報告する。

例年地域学入門では地域をつくるキーパーソンにお越しいただいており、鳥取の街の文化活動を担ってきた人ということで登壇をお願いした。県外からの移住者でもある奈良さんがどのようにこの町を見つめてきたか。この町に溶け込んでいったか。昨年末にお願いに伺い、数ヶ月前から発表用の原稿を用意し、推敲し、パワポを作って準備してください

た。(ドラメリアさん、ありがとうございました！)

移動祝祭日、運・鈍・根、リゾーム、初発衝動、オブセツション、存在が花するといったキーワードが挙げられ、18歳の奈良さんが大学(当時は全共闘など学生運動が盛んな時代だった)で感じていたことなど、今日の前にいる学生さんたちと同じ頃から40年以上にわたる思考の変遷を辿っていく内容になっており、考え、そして続けることの大切さがじわじわと沁みてくる。学生さんにとっては良きエールをいただいたとも思う。

奈良さんが講演を行うことは珍しいので、東京、大阪を含む県内外から多くの方にお越しいただいた。元々180人近い受講学生の他、本屋仲間、太極拳仲間、そしてチーム定有堂ともいうべきドラメリアさん、岩田先生。20と呼ばれる一番大きな講義室がいっぱいに。多くの人とつながり、支え、支えられあつてこの奈良さんの思考は練り上げられてきたことがわかる。(お越しいただいた皆様ありがとうございました。きつとこの通信の読者の方も多いはず。)

昨今学生たちの生活がインターネット中心に回るようになり、本を読まない学生が増えているのだが、図書館や本屋といった場所で偶然的に、必然的に手にした本が人生を変えることは多々ある。ネットで購入もできるが、自分の興味関心に併せてアルゴリズムで選ばれたもの以外に出会う

ことや、その前後に話す他愛もないおしゃべりは、本を介してできる人のつながりであり、その積み重ねと奈良さんの謎の巻き込み力により定有堂はかけがえのない場所になっているのであり、本屋(実店舗)は無くなっても、定有堂教室やこの音信不通という場が存在し続けている。まさしくリゾームである。

学生からは「自分の『なんとなく気になる』という直感を、役に立つかどうかで切り捨てずに大切にしたい」、「読書によって言葉に出会うことで、今まで言葉にできなかった無形の概念を表現できるようになる」という側面があると聞いて、本を読む楽しみが増えた」、「人が抱いた感情や考え、価値観といった目に見えないものは、そのままでは消えてしまいう可能性があるが、言葉として記録することで形を持ち、未来へつながっていくのではないかと思った」といったポジティブな感想が多く見られた。本を読んだり、書いたりという行為は自分なりのペースで思考をし続けるという自由を保つ側面もある。その豊かさに気がついてもらえたらよかったと思う。

さて、奈良さんの謎の巻き込み力に巻き込まれ、この音信不通に文章を書くことになったのとあわせて、太極拳教

室に時々邪魔するようになった。とはいえ、残念ながら練習日の土曜は公演等出張が多くなかなか行くことができなくて、順番も覚えきれていない。しかもダンスと太極拳は似ているようにだいぶん異なるので、なかなか苦戦している。特に重心の位置とこしばらくの加齢による筋力の衰えから少し違った姿勢になってしまっていることだろうか。爪先立ちが多い西洋の舞踊の場合重心が少し高く、足を外旋することで持ち上げる(ターンアウト)のだが、それと併せて少し前の方にのりがちである。それに対して少し踵側に残すような感覚だろうか。(私の場合を言語化してみたのですが、一般の方がこのままするとひっくり返ってしまったら、猫背の原因になるので、注意してください。)年齢と合わせて少しずつ体の使い方も変えつつある。こんなところも奈良さんから私が学んだことかもしれない。

莊子の言葉では真人は踵で呼吸をするという。背中を広くし踵で立つ。空を見上げて、土を踏み締めて、踵ですつきりと立つ。それがこしばらくの課題でもある。

帯の行方

板野 円香

(薬剤師・岡山県在住)

土曜日、仕事帰りに喜久屋書店に立ち寄る。それがここ数年のルーチンとなっている。書店には新刊・話題作・掘り出し物・特集で組まれた本など、様々な顔ぶれが揃っている。私はその膨大な面子の中から、何かの理由で或る表紙に目を留めて、それから帯に視線をスライドさせる。

『十七年前に二秒見えた海を探す。』

ほうほう、面白そうだ。自分の書架に迎え入れることにしよう。そうして本を買い、棚に差す。が、ここで一つの問題が浮上する。捨てるに捨てられず、かといってそのままにしておくにも邪魔になる、アレ。

「皆さん、本の帯ってどう処理しています?」

普段我々が「帯」と呼んでいるモノの正体は、正式には「紙帯」といって、更に言えば「腰巻」「袴」とも呼ばれる。その存在する位置の正しさから、好んで後者の呼称を使う作家も少なくない(京極夏彦は「腰巻」派)。

さて、この帯というものの、書店に並ぶ本を短時間で印象付

けさせるための重要な役割を担っている。ある報告によれば、人が書店で一冊の本を視界に捉える時間は、平均0.2秒。極めて短い時間だ。本の中身が面白いかどうかをジャッジする前に、手に取ってもらえるか否かを賭けた決死の生存競争が繰り広げられているのである。

帯の起源は諸説あり、明治三十三年発行の徳富蘆花著『自然と人生』(民友社)を元祖とする説や、大正三年刊行の阿部次郎著『三太郎の日記』(東雲堂)が最古とする説。昭和初期の左翼出版物が店頭宣伝のため付けたのが始まりという説がある。何にせよ、明治末〜大正初期には既に普及していたと思われる。因みに帯は日本独自の文化だそう。批評家の埴谷雄高は帯について、「単行本の腰にこれほど色とりどりの帯がまかれているのは、我が国だけの贅沢な現象だろう」と述べている(『批評基準の退化』、一九五五年)。確かに、海外で主流の簡素なペーパーバックに比べ、日本によく見るハードカバーなんか、しつかりした布地の表紙の上にカバーが掛けられ、更に広告まで巻かれているのだから贅沢極まりない品である。

捨てる派・保管派の割合はどうだろうか。ブックオフが行ったアンケートでは、「帯は取っておく派」は七十五%と大半を占めた。本屋で働くスタッフへのアンケートでありサンプリングバイアスも否めないが、それでも多くが捨てない派

と知り嬉しい。では、どの様に保管するのが良いだろう。色々調べた結果、次の候補が挙がった。

一、透明なブックカバーを掛ける。丸ごと保管してしまう方法。これなら出し入れの際に帯が痛む心配もない。でも装丁の手触りが損なわれるのは少し淋しい。

二、カバーの内側に入れる。本体に帯を巻いて、それからカバーを掛ける方法。お手軽で紛失の心配もないが、若干波打ってしまうので審美性を損なう。

三、本に挟む。単純かつ明快。本に挟んで葉としても代用しよう、という発想。しかし紛失の怖れがある。

四、クリアファイルやケースに別保管。コレクター的な発想。紛失や劣化の心配が無いが「どの本の帯だっけ？」となる危険性も孕む。

他には「本の天面に帯を掛ける」というトリッキーな手法もあったが、私個人としては「本との一体性／装丁に干渉しない／棚から出し入れする際の手間にならない」という条件は手放せない。さて、どうしたものか……。

解決策は思いも寄らない所に転がっている。その日、大学時代の友人とお茶をしに、彼女の住む愛媛県西条市を訪れていた。待ち合わせ場所は西条市立西条図書館。少し時間があつたので、本を読んで待つことにした。そして本を捲った瞬間、「これだー」という方法を発見する。本の見返し部

分に、二分割され角も丸く処理された帯が、ピッタリと貼り付けられている。意外にも、見返しの紙の色と帯のテイストがマッチしているようにも感じる。思わぬ「正解」を見つけ、以後、私はこの方法を採用している。

帯は本から切り離されては存在を欠く——マルティン・ハイデガーの「手元存在」では、道具はそれが使われる「道具連関」の中に置かれている時、はじめて道具として存在するとされる。つまり、物(帯)は文脈(本)の中にあることで初めてその本来の存在様式を得る、というものだ。また、ゲシュタルト心理学には「全体は部分の総和以上である」という考え方があ。部分を切り出した瞬間、全体として存在していた「何か」は消える。帯を別に保管した途端、それは宙に浮いた別の断片となってしまう。

限られた文字数で読者を惹きつける言葉を選び、背景色やフォントの意匠まで含め本の魅力を伝えようとする。そして「好みに合いそう」という予感や、ときには著者の狂気染みた半生までをも滲ませる文化装置。そんなものの安易に捨てられるはずがない。

※定有堂のカードも含め、一体のものとして大切に保管している



弔辞

おぎはら きえん (蔭山)

こつこつと吉田知子の本を集めている。吉田知子は一九七〇年に『無明長夜』で芥川賞を受賞した小説家だ。私は岸本佐知子のエッセイ『気になる部分』(白水社)で吉田知子という作家をはじめて知り、試しに図書館で『箱の夫』(中央公論新社)を借りて読んでみて腰を抜かさんばかりに驚いた。私がひっくり返っても感知し得ないものがそこに書かれていた。読書室ビオトープの参加者に吉田知子を知っているか訊いてみたところ、ほとんど知られていなかった。これは私が普及させねばなるまいと読書会の課題本に『お供え』(講談社文芸文庫)を取り上げさせてもらった。大阪のcorbooksでは、思いがけず吉田知子選集(景文館書店)を見つけ、荷物になるのも厭わず全三巻わっしと掴みレジに持ていった。県立図書館には吉田作品が一通り入っているが、ずつとそばにいてほしくて日本の古本屋を利用して少しずつ買い集めている。

そのように最近手に入れたエッセイ『さりげなく生きる幸

福』(海竜社)は、「さりげなく」なんてものではなく、強烈な文章にあふれている。

考えてみると「別れ」とは曖昧な言葉である。おそらく私は使ったことはないと思う。「別れ」などありえないのだ。「捨てる」か「捨てられる」かのどちらかなのである。

その関係をいい加減な甘ったるいクリームに包みこんで「別れ」などと言う。他の何かのせいでその事態が生じたのだと思うとする。(収録作品「別れる・捨てる・捨てられる」より)

私の両親は私が子供の頃に離婚した。姉と私は母が引き取り、父はひとりになった。母は父を捨てた。私は父に捨てられた。恋人にしてもそうで、私が捨てたか、私が捨てられたかだ。「別れ」は甘ったるいクリーム。確かにそうかもしれない。

死が別つ場合もある。以下も同作からの引用。

一番ひどい捨てられ方は相手が死ぬことである。もちろん、自然は当然だが、事故であれ病死であれ、死者は縁者を見捨てていったのだ。運命のせいでも体力のせいでもない。もしも、その死者が生前に病弱であったなら、なおさらのこ

と。その人は自分の病苦を逃れるために家族への執着心を捨てたのである。(同引用)

話はこの後、生命保険にも入らず子どもを育て上げた知人のシングルマザー、敗戦でソ連軍に連行され消息不明となった軍人だった吉田自身の父親のことなどが引き合いに出されている。「母は強し」などと言いたいわけではない。ニュースでは連日交通事故や殺人事件が報道されている。被害者側はこんな言われ方をされたらたまったものじゃないだろう。今なら炎上してしまうかもしれない。

しかしここには吉田知子が歩んだ人生なりの答えがあり、そういう信念と凄みを文章から感じ、私は得心した。

それから数日後、梅雨の晴れ間の、暑い日だった。私の愛車が運転中にエンストを起こし、慌てて路肩に寄せた。改めてスイッチを押しても甲高い変な音を立てるばかりでエンジンは一向にかからない。初めて「AY」を呼んだ。車はレッカーで連れて行かれ、私は陽光ふりそそぐ路上にひとり取り残された(その後お世話になっている車屋さんが迎えにきてくれた)。

愛車は新車で購入して十年、ちゃんと定期点検を受けてきたし、不調も感じていなかったので、多少の不安はありつ

つも帰ってくるものだと思っていた。数日後、車屋から連絡があり、エンジン内部の部品が機能しておらず、直そうとするともうエンジンの載せ替えになってしまったと言われた。見積額は百万円。

この車は、就職を機に買ってもらった軽自動車から買い替えたコンパクトカーだった。車に興味はなかったが(今もあるとは言えない)、かっこいいデザインとカラーに初めて「これに乗りたい!」と熱望し、資金を貯めて購入したものだ。運転の心地はそれまで乗っていた軽自動車とは歴然の差で、自分の運転で県外に遊びに出ることも多くなった。購入から十年、十萬キロを超えていたが、まだまだ乗る気だった。それなのに…。

私は愛車に捨てられたのだろうか。むしろ修理をせずに車を買ひ替える決断をした私が愛車を捨てたと言うのだろうか。いや、これこそ「別れ」だ。私は、そう言いたい。

初夏の音楽

堀内 菜摘

(秋田市在住)

ブラウンのワンピースに、ヒールの高いパンプス。6月の良く晴れた土曜日、とびつかりのおめかしをして向かったのは、「あきた芸術劇場ミルハス」。ベルリン・フィルハーモニーが一本のストラディヴァリウスをひっさげて全国を回る「スーパードレミアム・コンサート2026」が、秋田にもやってきたのだ。

ストラディヴァリウスを演奏するために結成された、弦楽器奏者12人とチェンバロ奏者の計13人の弦楽合奏団。ドイツやイタリア、フィンランド、オーストラリア、ブラジルなど9カ国から集まった。事前に購入したパンフレットには、国籍が多様化していることに関して、メンバーの一人が「音楽家の音を形作るのは国籍そのものではない。その人の文化的背景、教育、師事した先生、ロールモデル、そして刺激を受けた音楽家や芸術家たちが、最終的にその人の音楽的

な声を形作る」と話しており、期待が高まった。

午後3時、開演。一曲目はモーツアルトの「ディヴェルティメントニ長調K136」だった。チケットを取ってから何度も聴いた曲なのに、新しい曲を聴いているようだった。譜面は同じでも、響き方が全く違う。会場全体が私と同じように「これが生で聴くストラディヴァリウスか」と感嘆しているように見えた。J.S.バッハの「2つのヴァイオリンのための協奏曲ニ短調BWV1043」やヴィヴァルディの「2つのチェロのための協奏曲ト短調RV531」などが演奏された。

中でもヴィヴァルディの「ヴァイオリン協奏曲『和声の創意の試み』より『四季』」が圧巻だった。春の訪れや羊飼いのまどろみ、暑い夏のけだるさ、農作物の収穫、いつく寒さに震える歯……。作曲されたヴェネツィアは、北東北と緯度が近く、四季が似ているという。これから訪れる秋田の夏や秋、冬を重ねながら聴いた。

指揮者がいない中、お互いの息を合わせる13人。音楽だけでなく、彼らの息づかいや目線の美しさにも引き込まれた。心の底から音楽を楽しんでいるのが伝わってきて、観客は意識せずとも彼らと同じテンポで呼吸した。2階席から

見た観客は、風になびく稲穂のように揺れていた。

コンサートの幕が閉じ、数日たつても、まだ身体中に音楽が響いている。ふと、6年前の思い出がよみがえった。

コロナ禍によるステイホームに飽きてきた2020年6月のこと。両親は共働きのため、当時高校2年の弟と2人きりで過ごしていた。徐々にストレスがたまり、けんかをしてもおかしくない雰囲気だった。気を紛らわそうとテレビをつけると、新日本フィルハーモニー交響楽団が「テレワーク部を結成した」というNHKのドキュメンタリー番組が放送されていた。楽団員の一人が「一寸先はばら色」とコロナ禍を前向きに捉えていた。その言葉を聞いて、家族が笑顔になれる「何か」を始めようと思った。

翌日向かったのは、近所の楽器屋。初心者でも始めやすいと勧められた「ウクレレ」を手にとった。弟には打楽器の「エッグシェーカー」をお土産に買った。

「この家は南国にでもなったか」と父が突っ込んでくるほど、毎日ポロポロ弾いた。弟はシャカシャカ鳴らし、家はたちまち明るくなった。ウクレレは「心臓に一番近い楽器」。弦を

はじくと、心にじんつと響く。その心地よさのとりこになり、毎日3時間ひたすら弾いた。

7月、1人暮らしの祖母の誕生日に電話をかけた。「もしもし、なっちゃんく？」。祖母の声を確認して、弟と一緒に一呼吸。息を合わせてハッピーバースデートゥーユーを歌った。もちろん、私がウクレレで伴奏を担当し、弟は打楽器でリズムを刻む。祖母は「ドラマみたいや〜」と電話越しでも分かる涙声だった。いつもならお祝いのため親戚が集まるが、あの時はかなわなかった。また、当時74歳の祖母は、飲食店で配膳のアルバイトをしていたが、コロナ禍で仕事がなくなり、気を落としていた。「こんなにさみしい誕生日は初めてだと思っていた。今、特別な誕生日になったよ、ありがとう」と祖母は喜んでくれた。

心を込めて演奏した曲が、祖母を笑顔にした。私も弟も笑顔だった。音楽は、奏でる人も、受け取る人も、幸せになれる。音楽の力を実感した初夏だった。

I If I Like, I Do it

高木 善祥

(SHEEPSHEEP BOOKS)

五月五日、長らく使われていなかったクラブで開催された、謎のイベントに出店。SNSでフライヤー設置店を募集したので声をかけたところ、出店のお誘いを受けた形だ。

DJが曲を掛ける方ではなく、お酒を飲む方のクラブで、豪華なソファにきらびやかなシャンデリア、ふかふかの絨毯。キラキラと回るミラーボール。まだお金があったころの昭和が色濃く残るゴージャズな場所だった。ちょっとしたステージもあり、往時はハウスバンドがジャズを演奏していたそう。

イベントの趣旨に合わせて、店頭ではあまり目立たせていない胡散臭い古本を中心にセレクトし、売上もそれなりにあった。クラブ内は常時ほぼ満席で、普段の街ではあまりみかけない雰囲気をもとう方たちもいる。

懐古趣味はあまりないが、大人が大人であった時代に少し思いをはせる。

*

五月二十三日、境港のカフェに出店。すでに何度かお邪魔しているので、顔なじみの方も多く来られる。

十五時でいったん切り上げ、近くのイベントスペースのところで、読書会を行った。(自分の店でもまだやっていないのに出店先で初開催というのも不思議な話ではあるが)

今回は課題図書スタイルではなく、お気に入りを一冊紹介してもらう形式。初めましての方を含めて、参加者は全部で八人。順番にお気に入りの本の内容と、それにまつわるエピソードを話してもらった。その本を手につけた理由と感想。何度も読み返す理由。自分自身にどんな変化が起ったのか、もしくは起こらなかったのか。仕事で付き合いがある方の意外な一面が見られたり、初対面なのに本を媒介にすればグツと心理的な距離が近くなったり。

最後に「今後やると思ったらどんな読書会が良いか」も議論。様々なアイデアをもらった。

便宜上進行役ではあったので、おススメされた本の周辺情報やその著者の最新刊を付け加えることもやってみたが、無理に場を回す必要はなく、参加者皆さんが穏やかに話合う、とてもよい読書会となった。

ジャンルの縛りも設けなかったので、小説・エッセイ・絵本・料理書・人文書と幅広かったことも付け加えておく。

以下余談。

調査した訳ではないので根拠は薄いですが、境港では読書会はあまり行われていないらしい。

一方で「朗読会」は文化として根付いているようで、子供向けの読み聞かせではなく、大人に向けた朗読会が色々な場所で開催されていると聞く。

今回の読書会でも「朗読はされますか？」という問い合わせがいくつか届いき、それがとても新鮮だった。

文字で書かれた文章を声に出して読み、それをみんなで共有する。「新しい本の読み方／接し方」として、オーディオブック市場が定着したこととの共通点は見出せるだろうか。

社会学なのか民俗学なのか分からないけれど、調査研究により新しい発見があるかもしれない。

さて、お店の方でも読書会をするべきか…。

*

五月二十四日は若桜の「継ぐの市」に出店。「継ぐ」がテーマなので、古本を多めに持参、特に若桜に関する古書が売れた。他には九〇代のファッション雑誌なども。間借りさせてもらったお宅の人懐っこいネコとたわむれ、招き猫として店番してもらい、楽しい一日であった。

本を抱えて街へ。

【参考文献】

『本のある場所を訪ねて』 南陀楼綾繫 教育出版社
独立系書店、まちの本屋、小規模出版社、地方出版。

七月二十九日(水)に、著者を招いてのトークイベントを行います。聞き手は私と小取舎の村瀬氏。

かなり埋まっているので、問い合わせはお早めに。

『読書会の教室 本がつなげる新たな出会い 参加・開催・運営の方法』 竹田信弥、田中佳祐 晶文社
運営について具体的に書かれた入門書。手放してしまったので、もう一度買うか思案中。

読書会についての要望があれば、お気軽に店主までお声かけください

定有堂ビル2階 古書・新刊の本屋

SHEEPSHEEP BOOKS 店主 高木善祥

本を作る側から（40）

村瀬 謙介

（小取舎）

鳥取大学地域学部長の塩野谷齊さんと、美作大学や鳥取大学で非常勤講師をされている社会福祉法人陽のあたる学舎理事長の青木幹生さんが編著の書籍『保育者をめざすあなたへ』先人に学ぶ保育者論の発刊が三月末。鳥取の伝説のタウン誌の元編集長 安藤隆一さんの『ほんものの地域づくりへ』が五月一八日発刊。鳥取県教育センター所長や緑風高校の校長などを歴任され、以前、音信不通にも寄稿されていた坂本修一さんのエッセイ『猫風閣主人のひとりごと』にゃんぷうかくと読むが六月一〇日発刊。と、ほぼ一ヶ月に一冊出版していることになる。ひとり出版としてはかなりの刊行ペースである。

『保育者をめざすあなたへ』はIとついているからにはIIがある。なんだったらⅢまで作る予定だ。この本は「保育士ではなく「保育者」を目指すあなたへ向けた本である。なので保育士はもちろん、教育機関に携わる方や子どもを育

ている方、学校の先生や先生を目指している学生にも読んでいただきたい。見た目は教科書っぽくて納品させていただいた汽水空港の森さんに「これほんとに小取舎の本ですか？」と聞かれたが、真正正銘小取舎の本である。確かに小取舎っぽくないとは自分も思い、その夜はなかなか眠れなかったが、教育関係を中心に売れ始めると「教科書にはは相当面白い」とポジティブに考えることができた。小取舎が作る本はテーマが幅広い。鳥取に因んでいればテーマは幅広くありたい。キャラクターが「いづな」にしたのも最小の肉食獣と呼ばれ、夏は茶色の毛色、冬は真っ白になるからだ。八上姫、和気広虫・清麻呂、良寛、碧川かた、坪田譲治、やなせたかしという中四国の先人の生き方から保育のコツがわかる内容となっている。

『ほんものの地域づくりへ』は、タウン誌『スペース』を創刊するに至った思想や時代背景、著者がいた南信州の事例を用いた内容的発展や官民連携（市民が主役であることがミソ）、一九八三年から西尾知事が提唱した「ジゲおこし」や、今井書店によるジゲおこし、民藝運動の話まで盛りだくさんの内容の本である。しかも一五〇頁にまとめ上げている。これを読めば、鳥取県が行ってきた地域づくり、私からした

ら親世代の先輩たちが主導となって行ってきた地域づくりがどのようなものだったか大方わかるようになっていく。

そしてこういった地域における活動の歴史を手軽に読める本というのがいかに大事かということを出発点から実感した。安藤さんと野の花診療所の徳永進さんが、その世代の地域の貴重な話を下の世代に伝える「おでん塾」を二〇二四年の冬から企画し開催されてきたが、次回七月十一日に行われる4回目を持って若手(?)の私とシープシープブックスの高木さんに運営を委ねるという。ポップで若い人が来やすいようにしようと考えていたが、この本を読んでまた「ジゲ」というフレーズを流行らせても良いような気がしてきた。

ちなみにカバーデザインは安藤さんのご子息である安藤隆雄さん。網師本日海さんの題字を使って三パターンのカバーを作っていたのだ。

『猫風閣主人のひとりごと』は小取舎初の新書サイズの。小取舎から出した本の中ではかなり読みやすく面白い本だと思う。エッセイだからというのも要因だが、著者のエピソードの引き出しと、テーマを多角的に見ている点が独特

で面白い。さすが校長先生をされていただけある。大山麓にあるペンションを舞台とした本著と同タイトルの小説も掲載。

小取舎の最新刊

『ほんものの地域づくりへ——まちづくりはひとづくり』

安藤隆一 著

本体 一八〇〇円

発行 2026.5



『猫風閣主人のひとりごと』

坂本修一 著

本体 一一〇〇円

発行 2026.6



論語について(14)

小原 修治

(県立高校教諭)

湯梨浜町松崎在住)

子曰、惟仁者能好人、能惡人。(里仁篇第四・第三章)

子〔し〕曰〔い〕はく、惟〔た〕だ仁者のみ能〔よ〕く人を好み、能〔よ〕く人を惡む。

「仁者」とは、「仁」を身につけた人間のことだろう。本章は、そういう人間だけが人を好むことが出来、また、人を嫌うことが出来ると述べた孔子の言葉である。「惡」は、「にくむ」と訓じるが、嫌うというニュアンスに近い。好惡の情と言えば、今も好き嫌いを意味するからである。とはいえ、本章では「好」「惡」の前にいずれも「能」という可能を表す語が置かれている。しかも、それが可能なのは仁者だけとされるのである。どういふことだろうか。

楊逢彬『論語新注新譯』(北京大学出版社)は、この「能」の

語について、古代では好ましくなくことをする際には通常用いないから「正確地 zhèng què de」を補って現代語訳すべきであり、補ったとしても増字解経(本来は無い意味の語を加えた拡大解釈)には当たらないとする。中国語の「正確地」は、この場合は、日本語の「正確に」ではなく、「正しく」と訳した方が適切だろう。つまり、楊氏の説によれば、本章の「能〔よ〕く人を好み、能〔よ〕く人を惡〔にく〕む」とは、正しく人を好むことが出来、正しく人を嫌うことが出来るという意味になるのである。

孫欽善『論語新注』(中華書局)も「正確地」を補って解釈し、その正否は「仁」を客觀基準とする説明した上で、参考に次の二章を挙げる。一つは子路篇に見える「子貢問ひて曰〔い〕はく、郷人皆之〔これ〕を好まば如何〔い〕かん」。子曰〔い〕はく、未〔いま〕だ可ならざるなり。郷人皆之〔これ〕を惡〔にく〕まば如何〔い〕かん。子曰〔い〕はく、未〔いま〕だ可ならざるなり。郷人の善き者は之〔これ〕を好み、其〔そ〕の善からざる者は之〔これ〕を惡〔にく〕むに如〔し〕かざるなり」であり、もう一つは衛靈公篇に見える「子曰〔い〕はく、衆之〔これ〕を惡〔にく〕むも必ず察し、衆之〔これ〕を好むも必ず察せよ」である。

右の二つの章について簡単に述べれば、子路篇の方は、弟子の子貢が田舎の人々(郷人)の誰からも好まれる人はど

うかと訊くと、孔子は「まだよくない」と答えられ、次に誰からも嫌われる人はどうかと訊くと、同じく「まだよくない」と答えられ、「善良な者に好まれ、且つ善良ではない者に嫌われる人には及ばない」と言われたという話である。また、衛霊公篇の方は、孔子が「多くのの人々（衆）に嫌われている人でも必ずよく見よ、逆に、多くの人から好まれている人でも必ずよく見よ」と言われたのをいう。

本章を右の二章と関連づけて解釈した代表的な学者に楊樹達がいる。彼はこう述べている。「衆の好悪必ず察し、郷人の皆好み皆悪（にく）むも、孔子皆以（もつ）て未（いま）だ可ならずと為す者は、衆と郷人と皆は仁人ならざるを以（もつ）ての故なり」（『論語疏證』）。要するに、誰からも好かれる人、嫌われる人のいずれも孔子が「まだよくない」と答えた理由は、「衆」「郷人」が皆は「仁人」（仁者）とは限らないからとするのである。ここからは、孔子の「衆」「郷人」に対する不信感が読み取れよう。

『論語』には「子曰（い）はく、郷原は、徳の賊なり」（陽貨13）という印象深い一章がある。「郷原」の「原」は「愿」に通じ、慎み深い、真面目な、飾り気ないという意味の語である。そうした如何にも田舎にいいような好人物を孔子は「徳の賊」、即ち道德を害する人間であると見た。が、その言葉の真意は、「郷原」その人に対する批判のみならず、そのよう

な人物を好む田舎の人々に対する批判をも含むものと言えよう。思うに、本章に於いて孔子が仁者だけが正しく人を好むことが出来、正しく人を嫌うことが出来るとした背景にも、同様の批判が存在するのである。

前回、孔子の唱えた道德は、古い宗教を止揚することで成立したと述べたが、それはまた田舎の人々が好む土俗の道德規範とも異なるものであった。土俗の道德規範とは、狭い共同体でのみ通用する通俗道德のことであり、「郷原」とはその体现者である。後世、儒教は通俗道德とみなされ、事実そうだと言えるが、孔子が唱えた「仁」は本来それを超える普遍的な新しい道德であった。その意味で「仁者」とは、「郷原」と対照的な、新しい道德の体现者である。

君子でも人を嫌うことがあるのかという弟子の子貢の問いに孔子は「悪（にく）むこと有り」と答え、その例を挙げた上で「賜（子貢の名）や、亦（また）た悪（にく）むこと有りや」と問い返し、答えを求めている（陽貨篇24）。思うに、どんな人を嫌うかは「君子」たることの試金石であった。逆に言えば、嫌いな人がいない人間を孔子は全く評価していなかったのである。そこに「義」の問題がある。

直感批評

古賀 啓三

(米国ミシガン州在住)

久しぶりに頭が英語脳になってしまい、うまく日本語で考え、書くことへの切り替えができない。家人が長い書き物を書き了え、読んで感想を述べよ、というプロンプトを提示されたため。ダブルスペースだが400ページ超。英語。断って断れないこともないと思うが、断った際の自分の末路を思い遣ると断れない。英語を読む速度はおそらく日本語の五分のいくらいなので、他の読書が滞ることになり、このところ、最近読んだ本について感じたことをここに書くことが定着しかけていたが、そのスタイルに影響が及ぶこと必至。家人の書いたもののレビューを書けば一石二鳥なのだが、それでなくとも何言ってるかよくわからないという評判に輪をかけてしまう可能性大。

書くことがなくて先月の話を蒸し返すわけではないが、フオークナーを読み始めるやいなや、あ、これあれじゃん、新宮の路地のこと書いたほら、と齒痒く、「フオークナーに影響

響された日本の作家」で検索すると、中上健次、そうだよピンポン！え、だけど、大江も？という話のさわりの部分だけに触れたので、補完しなければならない。

名前を失念し、フオークナーに「影響」された作家、で検索はしたものの、文章を一瞥して、瞬時に脳がコネクトしてしまふほどの類似って、真似、だよな。かたや大江健三郎の場合、『同時代ゲーム』以降の私小説的作品の背景となった、四国森。これは、フオークナーが自分の故郷を基に創作したヨクナパトーフアという土地に触発されて、ということ、中上と並んで名前が挙げられてるんですよ、という咀嚼を経ての腹落ちなので、これは「影響でいい気がする」。

因果は巡る、ではないが、今度は、フオークナー『熊』第IVセクションを読み始めるなり、またまたガンという劇画的効果音とともに「模倣」の兆しが、『ポーターブル・フオークナー』の編者マルカム・カウリーが編者ノートで『熊』は、英語で書かれた最も偉大な狩猟、追跡の物語。その文体は作者の中でも極めて簡潔な部類に属する。そういう作品として読みたい読者は第I、II、III、Vセクションだけ読むことをおすすめする。IVは省け、とまで書くように、IVだけ明らかに異質である。冒頭から、終止符の少ない、長い長い読みにくい文章で、延々と続く少年アイクと、十六歳年長の、従兄違い(母の従弟)マッキヤズリンの対話。これってカラマゾフ

兄弟の大審問官じゃん！大審問官のパクリだよ！と直感し、大声早口で喚き立てる。

「その文体は作者の中でも極めて簡潔な部類に属する」物語の本編から、当該部分の晦渋で冗長な異質きのせいで、全く肌合いが異なっており、それまでの没入から、すくっと興醒めしてしまうところも大審問官といっしょ。しかし、その興醒めが、実は劣等感に裏打ちされているところも大審問官同様であることを実は直感しているのであった。誰が、って僕が。両者の、読者の知性を見下して、噛み砕き「簡潔に」書いた残りの本編から遊離する、ついて来れない読者など見捨てたこの異質さが、実はこの部分こそ筆者が書きたかったことだったのではないだろうか、とこれもおそらく直感だけが捉え得る真。

「フォークナーはドストエフスキの影響を受けていたか」も当然検索。愛読書は『カラマゾフの兄弟』『ボヴァリー夫人』『白鯨』で、『カラマゾフ』は毎年読み返すほどであった。そうですね。『白鯨』は娘だか息子だかに、絵本がわりに読んでやっていたらしい。

定有堂読書室ビオトープに参加させていただいているので、このところ、ほぼ毎月アマゾン海外発送で本を購入しているが、今月は次回の課題本『小泉八雲集』に加え、『カラマゾフの兄弟』も発注。大審問官に再挑戦。ついでに『白鯨』も。

これも決して他に書くことがなくて書くわけではないが、先月のフォークナーについても、「話のさわりの部分だけに触れたので補完」と書いたが、他の寄稿者の方々がどう思われているか不明だが、このコラムの長さは微妙に難しい気がする。クリシエで言えば、帯に短し襷に長し、と言ったところか。言い尽くすことはできないが、プライオリティの部分だけ残し、あとはバツサリ捨てる、というのが、何の練習かはわからないが、何かの練習にはなっているような気もする。そしてそれは、慣れて（麻痺して）くると、ある種快感でもある。先月、水原美苗の『大使とその妻』の感想も書いたのだが、これは捨てなければならなかった。この作家は寡作だが、昔から一目置いている作家で、形成期、というか、教育はほぼ国外（アメリカ）で受けていながら、日本語で書くことを選んだ作家。多和田葉子などより重要だと思えるのは、書く日本語が磨かれているから。『大使』は、もう高齢なので、長いのはおそらくこれが最後、と言われているのが残念。でもこの作品、下巻に大きな瑕疵があるように感じられた。確か視点の問題だったと思うが、今月もここまで再びバツサリ。

思ひ出はモノクローム

ムラカミヒロミ

(フライングブックマン)

石油が入らない、ナフサが足りない、と大騒ぎである。

菓子のパッケージが、とうとう白黒印刷になった。近所のスーパーマーケットは、まだカ○ビーの「か○ぱえび○ん」だけだが、ニユースで見た他県のポテトチップス売場は、みごとにモノトーンであった。全メーカーが白黒になったら、ギフトショップの香典返しコーナーみたいになるんじゃないかと思っていたが、むしろホームセンターの土・肥料売場のような雰囲気である。

インクなら、食品以上に出版業だろう。文字だけの本ならまだしも、フルカラーが命の美術書や料理本、園芸書、絵本の類、ましてやグラフィア雑誌など、どうなることか。

いやいや、そもそもインク自体が石油由来の製品なのだ。「黒だから」「白」だからとゆめ安心はできない。

大体、美術書がオールカラーになったのは、そう古いことではなく、昭和の中頃までは、最初の数ページだけがカラー

で、後は白黒といった画集は珍しくなかったし、見開き毎に、カラー、白黒、カラー、白黒と交互になっているものもあった。

さてさて、紙にしているからが、様々なコーティングがなされ、とても紙とは思えないような紙が装幀、造本に使われている。これらも石油が化けたものだから、無傷でいられる出版物は皆無と言ってもいいだろう。

それだけでなく、ここ数年の出版物の値上がりは凄まじいというのに、この上、紙代、インク代、糊代までが上乘せされたら一体どうなることやら。エンターテインメント系文庫の最低ラインが千五百円、学術系は三千円、てなことになったら嫌だなあ。

まだ何年後か、何十年後かと予測されていた、電子書籍による紙書籍の駆逐が完了する前に、高級品になり、骨董品化して、めでたく美術館や博物館の殿堂入りとなってしまうぞうだ。

ひと頃、白黒映画をカラー化する試みが盛んに行われたが(カサブランカ「ローマの休日」など)、近頃は、わざわざカラーを白黒化して再公開するような動きがある。これま

でも、回想シーンなどを白黒やセピア色で挿入する演出はあったけれど。

映画美術の専門家に言わせると、白黒だから当たり前に白黒フィルムで撮れば、それでよし、という訳ではないらしい。色にも演出が必要で、手前の草をわざと黒く塗って、遠景との空気感を出したり、雨に墨を混ぜて土砂降りを際立たせたり、といったことをしていたそう。カラーが入った当初も、衣装やセットの色が思うように発色せず、フィルムの性質に合わせて、現実の色の方を塗り直したともいう。(内藤昭・東陽一『映画美術の情念』リトルモア、1992)

これで思い出すのが、漫画のカラー原稿である。印刷時の発色を想定して、水彩やインクの色を薄めに加減した、とはよく聞いた話だ。(そう言えば、二色カラーというのもありました。あれも、かなり特殊なカラーリング技術が必要だったのではないかと思う)

演劇評論家・安藤鶴夫はグレー好きで、背広は必ずグレーであった。春のグレー、秋のグレー、といった按配で様々なグレーを作った。利休鼠、薄墨色、時雨、埋火、猫柳、グレーのヴァリエーションは数多ある。しかし、周りの人間は

気付かず、安鶴(あんつる)は着た切り雀、と囁かれていた。家人でさえ、新調する甲斐がない、と嘆いたそうである。

しかし、ある時、着替えの最中に友人が部屋に入ってきて、洋服筆筒の中を見て驚いた。グレーの背広がずらりと下がっていたからである。爾来、安鶴は洒落者だ、と評価が変わったそう。親友・齋藤磯雄との往復書簡集『ごぶ・ゆるね』(みちのく豆本の会、1969)に見えるエピソードだ。齋藤は、「灰色の唄にまきりてゆかしきはなし」、「身だしなみが完璧であるためには人目を惹いてはならぬ」と、ヴェルレーヌとブランメルを引いて安藤のセンスを評している。

その齋藤は、これまた黒一辺倒であった。英国生地¹の黒ばかりを作らせ、時に十九世紀風に、ウェストを絞り、裾を広げ、襟に天鵝絨をあしらったりした。片やモンテスキュー||フザンサック、片やシャルル・ボードレール²ばりのダンディズムではなからうか。美しき哉。

内坪井町日記（25）

齊藤 仁昭（ケバブジョンソン・

元長崎書店勤務）

六月某日

コスパとはタイパとか何とかは、我々の時間も空間も何とかも何もかもをお金に換算しそこから掠め取つてやろうという考え方のカモフラージュではないんじゃないかなるか。俺はもう少しゆっくり歩みたいんです。ほつといてくれないものか。スピード感が大事、みたいなのも苦手だな。わからなくはないのだけれど、自分が即断したり、すぐ行動に移すとだいたい良い結果が出ないので、乗れない。

六月某日

朝から雨が降っている。胃痛がするし食欲も落ちていて心配になったので近所の胃腸科へ行く。坪井に越してきて初めて行く病院。

先生がだいぶん高齢の男性だったが、説明の言葉が親切で丁寧で安心。検尿と、血液検査用に血液を抜いてもらっ

て、翌々日の朝にエコーと胃カメラの予約をしてひとまず終了。

胃カメラは別の先生がするらしく、「うちには胃カメラの名医がいるから」と教えてくれた。壁に「名医のいる病院」というムックの表紙のコピーが貼つてあった。これに掲載されている方なのかな。

六月某日

前回、何年か前に別の病院で胃カメラを飲んだ際はうっかり子どもに勧められて朝からどら焼きをひとくち食べてしまったので、今回は何も食べないようにテーブルに「絶食」と書いたメモを貼りつけておいた。無事に何も食べずに病院へ。

まずはエコー。「痩せてるのに脂肪肝だね」と言われる。改善していない。運動不足が解消できていない。その他は見える範囲では問題なし。

別の部屋に移り、次は胃カメラタイム。看護師さんにおいてくれない液体を飲まされたあと、ベッドに横になり、点滴。眠くなる薬を入れていきますと言われ、名医の先生が何か話しかけてくれている気がしたらもう寝ていた。

起きたら昼だった。もっと寝たかったが起きて、先生の説明を聞く。説明はおじいさん先生からだった。軽い胃炎では

あるが大きな問題はないとのことで一安心。

六月某日

百貨店にて菓子工業組合のイベント。今日から六日間にわたってお菓子の販売。どうも百貨店にお客さんの入りが悪いように見受けられる。いまひとつ盛り上がらないままではあったが、つつがなく終了。

六月某日

仕事を立て込んで遅くなり、翌朝も五時には出社したほうがよきそうだったので八代に泊まることにした。八代にてバドミントンの大会が開催中らしく、選手のように見受けられる人々が街に多い。

チェックインしてベッドで一休みしていると編集長より原稿についての連絡あり。いつも遅くなってしまう、たいへん申し訳ありません。ノートパソコンを持ってきていなかったのので日記の続きが書けず、翌々日まで待つてもらえないかと返信。

夕食を食べに行くのを面倒くさがって外出をためらっていたら、部屋の内線が鳴る。あんまり内線がかかってきた経験がないので何事かと思つて恐る恐る出ると、「駐車場の齊藤さんの車にバドミントン大会の送迎バスがぶつかってしまっ

たらしく、降りてきてくれないか」とのこと。

フロントにバスの添乗員さんが待つており、謝罪をされたのち現場に向かう。バスの右後方が僕の車の左前方にめり込むようにくつついてしまっており、バスはもう二進も三進も動かせない様子。警察も既に来ており、説明を受け、僕の車を少し後方に進める。バスは動けるようになり広い所へ移動していく。警察に免許証など必要なものを出して書類などを作成される。運転手の方が丁寧に謝罪され、事故はしょうがないので大丈夫ですよと返事。保険会社とやり取りしてスパッと済ませましょう。ボンネットがずれていてやや不安ではある。

ひといきつてのち、セブイレブンで適当な夕食を買って、部屋で食べて寝る。

六月某日

早朝より昼まで仕事ののち、車をディーラーのところに持ち込んで見積もりを取る。五十万くらいかかりそう。

真夏の夜の夢

三浦 永理

(三十一歳女性)

シェイクスピアの『真夏の夜の夢』には、夜遅くまで明るく夏至の世界が描かれている。実際、ロンドンでは夜十時近くまで明るく、朝も四時ごろには日が上がる。だんだんと天気安定して、過ごしやすくなっている。そんな日もあるのだが、日差しは急激に鋭くなる。そして、エアコンの設備がほとんどない中、三十五度まで上がるような熱波の日もあり、結局日本の方がまだマシのような気がする。私たちのように暑い地域から留学している人たちは、自分の暑さに耐える能力のなさにうろたえているようだ。全てはエアコンのおかげだったのだ。部屋の中でこもって作業しようにも、カーテンを開けることすらままならない。が、夜は日本と違って十度台まで落ちていく。夜から早朝にかけて、外の冷気を取り込むことが肝心だ。

そんな夏至の週末に、日本から来た友人と参加したのが、West End Live というミュージカルの屋外ライブだった。ナショナルギャラリーのあるトラファルガー・スクエア

で、コロナ以来開催されている無料のライブで、様々なウエストエンドの作品から、出演者が来て数分のパフォーマンスをしてつないでいく。土日の日中に開催されたイベントだった。

ニューヨークのブロードウェイとも並び称されるロンドンのウエストエンドは、演劇、ミュージカルの一つの聖地である。毎年一千七百万人もの観客が来ているらしい。ロンドンにある劇場街は、私がこの街に来ることになった決め手でもあった。一方で、学期中は忙しく、演劇専攻でもない私は、月一・二本しか見られておらず、そのライブを観ながら、「ウィキッドも観たい」「オリバーの子役も気になる」などなど残り少ない留学生活でどうやって作品を観るかを考えていた。

観た作品の中で印象に残ったものを挙げるのは難しい。これを書いている今は、『ハリー・ポッターと呪いの子』の感激を週末に控えた平日である。元々四幕構成でオープンした作品であり、なんと十三時の開演から夜二十一時までの長時間の戦いだ。この四幕構成版もまもなくロンドンからは去ることになっているので、駆け足で観に行くことにした。

ハリー・ポッターは確実にイギリス文化を世界中に改めて発信した二十一世紀の一大コンテンツであったことには違い

ない。オックスフォードのツアーに行っても「いわゆるハリポタの大広間のシーンのイメージ」などと例に出されたり、一部のカレッジは撮影に使われたことを観光のネタにしていたり、世界中の人にイギリスの寄宿学校やカレッジ生活のイメージを広めた。

先週スコットランドのエジンバラへ行った。この街は「ローリングがハリー・ポッターを書き始めた場所でもある。作品を描き始めたカフェは、一大観光地となっている。それでも、あの魔法の世界はここから始まったのだと、それに騙されてしまつてこの国まで来てしまつたのだと、その店の前で思わず感慨に浸つた。そもそも、私が文章を描き始め小説を書きたいと思つたのも、小説を読み始めたのも、あのやたらと長いハリー・ポッターのせいなのである。

どこかで四幕構成版の舞台が復活する可能性はあるか。それはもしかしたら、難しいかもしれない。作者である「ローリングはトランスジェンダーに対しての否定的発言、つまり差別的言動によって、作品の出演者たちからも非難されている。六月は Pride Month であり、ロンドン中に LGBTQ をサポートするレインボーフラッグが飾られている。それだけ多様性を享受し、支持しているこの街で、彼女の作品に対してアンビバレントな感情を持つ人も多い。

私自身、ロンドンでは、差別を受けたことで不快な思いをしたという経験がほとんどない。ロンドンの市長がムスリム系であることを批判する「日本人の投稿」は目につく。実際、ロンドンにはムスリムであっても、ハラル食のオプションが当たり前にあり、生活しやすいように思う。パキスタンなど南アジアからの移民だけでなく、世界中から移民を惹きつけているからこそだ。

West End Live を思い出すと、常にBSL(イギリス手話)の感情のこもった通訳がいた。実際の舞台でも手話通訳のいる回や、音声補助のある回などが設定されている。アクセシビリティという概念が行き渡っている。もちろんそれでも不足はあるかもしれない。古い地下鉄や建物には階段も多い。イギリスは高福祉社会ではない。BC 離脱後、経済は苦しみ、ホームレスの姿も多い。一方で、家族で高級なアフタヌーンティーを楽しんでいる人々も、エリートのパブリックスクールに通う人もいる超格差社会だ。

それでも、明らかに多様な人々の存在が visible(可視化)されている国と言える。それは夢なのか。

いきものがたり ミニ

あきの素生

(くうねるめがね)

エビが山ほど増えた。なかなか水槽に定着しないと頭を悩ませていためだかのタンクメイト、ミナミヌマエビの話だ。試行錯誤(?)の末、稚エビが孵化した喜びを昨年ここに綴っていたが、それも今は昔のこととなり、繁栄のときを迎えている。反対に、めだかは数が減り、ひとつの水槽に二匹ずつしかいない。無駄なけんかをせず、ゆったりしてよいようなものだが、何よりエビがのびのびとして、めだかがエサを食べているところに背泳ぎで突っ込んでいたりしている(水面に浮かぶめだかのエサを食べるために背泳ぎするのだ)。さながら“エビ帝国”といったところである。

もともと、めだか水槽の苔を食べてもらうタンクメイトとして、ミナミヌマエビを導入した。その仕事はしっかりと果たしているようだ。冬は、水換えの頻度を少なくしているの
で水中の養分が過多になりがちだったり、防寒のために日の

当たる場所に水槽を置いていたりするからか苔が生えやすく、昨年の春先には水草が苔まみれになっていたのだが、今年はきれいなままだった。ただ、水槽に生えた苔は、なかなかきれいにしない。

エビ以外のタンクメイトに、ヒメタニシがいる。彼らも苔を食むものたちだ。ヒメタニシたちはひとつの水槽に集めていたのだが、エビが増えてエサが行き渡らないのか、土に潜ってじっとしていたり、脱走して水槽の外に落ちていたり、ほとんど姿が見えなくなっていた。そこで、苔むして側面からは中が見えなくなってしまうっている水槽にタニシを移してみた。すると案の定、水槽壁面の苔を休みなく食べ続けている。思い返せば、引越し前の水槽も、冬の間に苔が生えてしまい、エビには手強い類の苔も、タニシならばきれいにできるかもしれないとのうっすらした期待を持って導入したのだったが、一年ほど経った今改めて見てみると、件の水槽は苔ひとつ生えず、ぴかぴかとしている。きつと引越し先の水槽もそのうちぴかぴかになるだろう、と朝に夕に水槽をのぞき込んでいたら、いつの間にか子タニシが生まれていた。栄養状態がよくなったこともあるだろうが、水温が一定してあたたかくなってくると、水槽は新たないのちを迎えはじめる。

エビの勢力に押されているめだかも例外ではなく、今年もぼつぼつと卵が孵化している。一年ぶりに見るめだかの赤ちゃん「針子」は、溶けてしまいそうなほど小さく儂げだ。親たちから離し、水草の切れ端などと一緒に小さな容器に入れて育てている。

「めだか水槽」といっても、本格的な水槽は持たず、横幅三十センチ程度のアクリルボックスやガラス鉢、プラスチックのめだか鉢などを使用している。この「プラスチックのめだか鉢」というのが技ありで、二重底のようになっており、上の底板に開いた複数の小さな穴から汚れが下に沈み、鉢の横に付いている口から汚れた水が排出できるようになっている。ほかの水槽は汚れをスポイトで吸い取って掃除していて、それも頭を空っぽにして集中できるよい時間なのだが、このめだか鉢はものぐさの自分にぴったりで気に入っている。

あるとき、このめだか鉢から汚れた水を流したら、稚エビが数匹一緒に出てきた。汚れた水は、一旦大きめの洗面器に入れてからまとめて捨てるので、そこで稚エビを救うことができた。

稚エビは立派にエビの形をしているが、体は透きとおり、針子に負けず劣らず小さい。せっかくなので、針子の容器に

入れて一緒に育てることにした。

針子と稚エビの容器の中は、小さくこわれやすい繊細な世界のように感じられ、おそろおそろ世話をした。針子に当たらないように、おそろおそろエサを振り入れる。おそろおそろ汚れを吸い取り、おそろおそろ水を足した。

午後、窓から日が差し込むようになると、水草の切れ端から気泡が始める。光合成だ。茎の断面から水面に向かってまっすぐに、小さな泡が規則正しく立ち昇る。薄い葉の表面にも、空気の粒がぼつぼつとついて、たまに思い出したように、葉を離れて浮かんでいく。柔らかな黄緑色の光が乱反射する透きとおった世界の中で、小さなものたちが懸命に動いている。

見ていて飽きない。これだから、いきものがかりはやめられない。

案内



ドラメラリア (座敷わらし)



定有堂教室「読む会」(講師 岩田直樹氏)

定有堂教室「ドウルーズを読む会」

定有堂教室「読書室ビオトープ」

それぞれ会場は とりぎん(県民)文化会館

葉香太極拳クラブ

会場 麒麟スクエア(市役所二階 水曜夜・土曜昼)

・定有堂教室と太極拳の詳細は

下記の、QRコード参照

(@ドラメラリア)



『音信不通』紙版の置き場

・県立図書館2階ハンフコーナー

・エスキース(倉吉)・森の生活者・邯鄲堂・

・cafe mellow(カフメロウ)

・SHEEPSHEEP BOOKS(定有堂ビル2階)

・定有堂ビル2階「音信不通」編集部



・編集後記

鳥取大学の講義ではスライドの編集・操作を担当しました。当日はボタンを押すだけの簡単なお仕事。「文章も自由に直して」と御本人は仰いましたが、奈良語・奈良節独特のわかりにくさが「そのままだ」と伝わるように努めました。翻訳はしていません(というかできない)。

なお、N氏とIさんの生成画像は能動的に作ったものではなく、Googleフォトが思い出機能で突然提示してきたのでした。びっくり。時々猫との思い出をアルバムにしてくれることもあり、機能をお役にできないでいます。柄の似た違う猫が混じってたりするのは(愛嬌)。

あきさんの飼育記を読んで、自分も何か育てたくなりまして。生き物はやめておいて、お世話の手がからない多肉とかにしてみようかな

ドラメラリア(編集長)

本屋と小商いについて考える機会がありました。個別の取引の中で、「ニツチ(分際)」を探して生きる。「する」でなく「なる」。けもの道を生きる。同じでもあり同じでもなく。引力圏から遠ざかる。プリコリージュ。カスタマイズ。それが「個性派」。あらためてそのように思いました。「独立系」とはまたひとつ違う世界です。

奈良敏行(発行人)